

「自己と向き合うということ」

多々良文都

現代社会は日々、目まぐるしく動いています。その中で生活する私たちはいつの間にか、この激しい変動に巻き込まれとても忙しく流されるように生きています。ちなみに忙しいという字は「心を亡くす」という意味を持っています。

この社会に生じる、あらゆる出来事が瞬時に世界を駆け巡ります。その圧倒的な情報量とスピードは私たちの感受性や思考力を超え、戸惑いを覚えます。そして、そのような状況の中で暮らしていると、思索するとか対話するということから遠ざかるような気がします。情報が次から次へと発信され、うろうろしていると、今受け止めた情報がしばらくすると過去のものとして処理されてしまいます。

昨今の政治や経済におきましても、「いつの間にか」「知らず知らずのうちに」と表現できるような出来事が多々あるのではないのでしょうか。例えば集団的自衛権や原子力発電の問題です。

わが国では戦後、西洋的な生活様式や考え方が導入されすっかり定着してきました。市場資本主義社会の中で生活していると、立ち止まったり、静かに自らの足元を確かめている余裕がなくなってしまうのではないのでしょうか。何より立ち止まっていたら、取り残されてしまうという焦燥感をいただくのではないのでしょうか。自己と向き合うということがしづらい、また不得手になってきたと思うのです。

ところが余談になるかもしれませんが、最近感心していることがあります。それはアスリートのインタビューの中の話です。勝敗に係わらず自らを客観的に分析していることです。常に課題を提示しています。

仏教では煩惱をきやくじん客塵といいます。自己とは何であるかをしっかり認識することが何より大切ではないのでしょうか。人間の分限・私の分限を超えた阿弥陀様から私への願い・呼びかけに気づくことが大切だと思います。